

—関係部署—

糖尿病・内分泌代謝内科
検査科

—概要—

甲状腺はのどにある10g程度の甲状腺ホルモンを産生する小さな臓器であるが、ホルモン異常、自己免疫疾患、がん等様々な病気が比較的高頻度で発生することが知られている。ほとんどの疾患は適切に治療すれば命にかかわることは稀であるが、その反面完治させることは難しく、長期にわたる適切な管理が必要となる。また、甲状腺ホルモンは全身の臓器や精神状態に影響をもたらし、また妊娠・出産にも影響するため、多くの専門家との連携の上で診療する必要のある患者もしばしばでてくる。

当センターは甲状腺学会認定専門医施設であり、甲状腺専門医が診療を担当している。バセドウ病・橋本病等の甲状腺ホルモン異常の診断・治療から甲状腺がんの診断まで甲状腺の異常に伴う様々な病態について幅広く診療し、バセドウ病眼症や甲状腺疾患合併妊娠の管理等にも対応している。また最近問題になっている甲状腺がんの過剰診断例の経過観察についても相談を受けている。

甲状腺腫瘍に対する超音波ガイド下穿刺吸引細胞診や甲状腺の核医学検査・治療等、甲状腺疾患の特殊な検査・治療が実施可能である。特に、穿刺吸引細胞診は非常に低侵襲・短時間で実施できる方法を用いており、核酸診断による判定も導入している。超音波検査専門の外来枠を開設しており、患者は1回の受診で超音波検査を受けてすぐにその場で結果の説明を聞くことができ、必要であればその場ですぐに細胞診を受けることができる。

当センターは地域のかかりつけ医からの紹介数が非常に多いのが特徴であり、甲状腺に問題がある症例の紹介を受けた場合、当センターで診断や治療方針を決定し、病状が安定した段階でかかりつけ医への逆紹介をするなど、最終的に患者の通院負担を最低限にできるような治療方針をとっている。

—実績—

(2021年4月—2022年3月)

- ・外来のべ受診者数
1,194名
- ・外来新規患者数
211名
- ・甲状腺超音波検査・穿刺吸引細胞診実施数
203件
- ・バセドウ病アイソトープ治療
4件
- ・甲状腺嚢胞に対する経皮的エタノール注入療法 (PEIT)
1件

—今年度の成果と反省点—

昨年度に比較して、感染症が蔓延した影響で外来新規患者数は横ばいであった。半面、診療した患者の病態の範囲が拡大し、産婦人科、小児科からの紹介患者が増加、耳鼻咽喉科・頭頸部外科への手術目的紹介の患者も増加した。ブランマー病や未分化癌等の希少な疾患の治療も経験した。2021年12月に日本甲状腺学会認定専門医施設となった。

—来年度への抱負—

感染症が下火になれば、近隣の医療機関からの紹介数が増えるものと予想される。外来診療や検査数の増加に対応できるよう、診療のキャパシティのさらなる増加に努めたい。また、いくつかの特殊な甲状腺の病態については診療方針をマニュアル化することで受け入れ態勢を整えていきたい。



甲状腺超音波検査と細胞診の様子